

-1 情報社会論2(理論)

翻訳的視点からの情報創造

The creation of information from a viewpoint of translation

○大澤健司¹，米山優¹，秋庭史典¹，曾我千亜紀²，井上寛雄³，霜山博也¹，
中村啓介¹

○Kenji OSAWA, Masaru YONEYAMA, Fuminori AKIBA, Chiaki SOGA,
Hiroo INOUE, Hiroya SHIMOYAMA and Keisuke NAKAMURA

¹ 名古屋大学情報科学研究科 社会システム情報学専攻

² 大阪産業大学文化コミュニケーション学科

³ 中京大学 非常勤講師

Abstract In the present information society, we can experience various matters. Then, it is possible to experience what we could not experienced in past times. Transmission format of experience is also changed by changing of the times and technology. Therefore, in this paper, focusing on the concept of experience in Walter Benjamin, we would like to consider the concept in terms of translation and creation. Now that the poverty of experience (particularly in cyberspace) is feared, it is an important strategic preparation in order to consider the experience in cyberspace.

キーワード ベンヤミン，翻訳，創作，経験，助言

1. はじめに

現在の社会は、情報過多の社会であると言えるだろう。我々の周囲は情報で溢れかえっている。ここで問題となるのは、情報の授受という場面からのみ、情報を語ろうとすることである。中村も述べているように、「たえずメッセージをつくり出し、交換することこそ、なによりも中心に捉えられる」¹べきなのである。つまり、情報の授受の重要性に関しては同意するにしても、情報を創り出すという側面にも注目しなければならない。

かつて、「我々は貧困になってしまった。」²と述べた哲学者がいる。何が貧困になったのかと言えば、それは「経験」(Erfahrung)である。我々の周りが情報で溢れるにつれ、我々の経験が貧困化してしまったのだ。そこで彼は、この問題を次のような方針で論じていく。

経験の貧困。すなわち、このことを、あたかも人間が新たな経験の切望しているかのように解してはならない。それどころか、彼らは経験から解放されることを切望している。³

我々は一度、もろもろの経験から解放されなければならない。しかしそれは、真の経験のようなものを追い求め、そして発見することでは決してない。それは貧困化した経験を、後に述べることになる、「未開の状態」(Barbarentum)とすることにも関係する。経

験の貧困化という状態をある意味において肯定的に捉え、このような状態から何が見出されるのかを考察することこそ、我々の使命であろう。つまり、この未開の状態において、我々の経験と情報がどのように関係してくるのか、我々はどうのように情報を創り出すのか、という観点から、情報概念は考察される必要がある。

そこで本論では、ベンヤミンの翻訳論、そして経験の概念に着目する。ベンヤミンの翻訳論を中心に、情報過多の時代における我々の経験を巡り、情報の創造という観点に対して一つの示唆を与えることが本論の目的である。

2. 翻訳と創作

ベンヤミンの翻訳論、そして言語論は、「言語一般および人間の言語について」⁴から「翻訳者の使命」⁵へと接続される。彼の特異な言語観は、これらの著作を貫くものとしての「純粹言語」(die reine Sprache)⁶に起因すると述べても過言ではないだろう。しかしながら本論では、この純粹言語の概念を背景へと沈潜させ、それには深く言及せず、彼の翻訳論から経験の問題へと接続する一歩となることを試みる。そこで、先ず、ベンヤミンの翻訳論における翻訳と創作の差異について概観しながら、経験の問題を捉えていきたい。

経験の問題へと接続するためには、自己の問題に踏

⁴ GS II

⁵ GS IV

⁶ 現段階では、この純粹言語という概念は、E・グリッサンにおける「全-世界」(Tout-Monde)という構想に非常に近いものである、という示唆をするにとどめたい。

¹ 中村, p. 12

² GS II-219

³ GS II-218

-1 情報社会論2(理論)

み込む必要がある。端的に言うならば、我々という自己は、内部的なものと外部的なものによって、二重に規定されているものである。内的な関係性と外的な関係性によって、言い換えるならば、内的な「星座」(Konstellation)と外的な星座の関係性によって我々はこの世界に生き、そして自己として存在している。このどちらの一方が欠けていても、私という自己が存在し得ないのは明白であろう。では、このような自己規定の二重性という問題を翻訳と創作という場面から見た場合、それはどのように捉えられるのであろうか。

翻訳者の使命とは、翻訳の言語への志向、翻訳の言語において原作の反響を呼び覚ますあの志向を見出すことにある。この点に、創作とはかけ離れた翻訳の特徴がある。というのも、創作の志向は決して言語それ自体へ、言語の全体性へ向かうのではなく、ただひたすら直接的に、特定の、言語的な内容の連関へと向かうからである。(中略)詩人の志向は、素朴な、始原的な、直感的な志向である。翻訳者の志向は、派生的な、究極的な、理念的な志向である。⁷

自己規定の二重性という問題は、ベンヤミンが述べる翻訳と創作に対応するものである。つまり、翻訳とは外部的なものによる自己規定であり、創作とは内部的なものによる自己規定であると、仮に述べることができるだろう。創作とは、私という自己にしか語れない物語を創造することであり、それはすなわち、自己の中に原作を創造するということである。それに対して翻訳とは、私と違う別の自己、つまりは他者の物語を翻訳という行為において志向するということである。他者の物語における、原作の意味としての深い森に立ち入ることなく、それと外から対峙する形で、原作を諸言語の全体性の圏域へと誘い込むのである。

つまり、創作とは言語によってその言語内の意味の関連を創り出す次元であり、翻訳とは諸言語の全体性と関係する圏域を志向する次元なのである。これらの二つの行為とは、端的に言えば、次元が違う行為である。したがって、ベンヤミンが述べているように、これらの行為を単純に混同することは危険である。

原作には、翻訳において伝達以上のものである何かがある。より厳密に言えば、この本質的な核は、翻訳それ自身において翻訳不可能なものであるとして定められうる。(中略)それは、原作の詩人の言葉のように、移し変えできないものである。⁸

この後に、ベンヤミンが原作を果実と外皮の例で、そして翻訳作品を王のマンツの例で語るように、原作と翻訳作品においては「内容」(Gehalt)と言語の関

係が全く異なるのである。原作においては内容と言語がある種の統一のようなものを形成していたとしても、翻訳作品においては、それは王の身体にまわりつく、襷を持つマンツのような関係性しか持ち得ない。なぜなら、ベンヤミンの翻訳論においては、通常の翻訳論に見られる意味の伝達という役割を拒否するからである。つまり、ベンヤミンの翻訳論においては、創作とは意味を創り出すもの、翻訳とは諸言語の関係性としてある純粋言語を志向するものとして、これらは明確に区別させられている。

創作において創り出された原作の意味は、翻訳においては翻訳不可能なものとして原作の中に残り続ける。例えば、翻訳に深く関係する言語の問題に関心を持っている詩人であり思想家であるグリッサンは、翻訳には詩人が他者に対して放棄する自らの部分としての諦念があると述べ、次のように続ける。

私はみんなのために、不透明性(原文ママ)への権利を要求する。それは自己閉塞ではない。

それは様々な普遍性モデルの虚偽の明晰さへあまりに多くのものが還元されてしまうことに対する対抗措置である。⁹

翻訳には、必然的に翻訳不可能なものが生じる。それは、他者にとっては(むしろ、自己にとっても)不透明なものである。しかし、この不透明な部分があるからこそ、それは他者との差異を持つ自己足りえるのではないだろうか。グリッサンも述べているように、それを肯定的に捉えることこそ、後に述べる情報の創造を考察する際に重要となってくるであろう。

先に述べたように、我々の自己は二重に規定される。この問題を翻訳と創作に接続するなら、自己を内的なものとの関わりにおいて規定することこそ創作であり、自己を外的なものとの関わりにおいて規定することこそ翻訳であった。それらを行為という面から見れば、ベンヤミンが述べるように、明確に区別されなければならない。しかしながら、それらを自己という観点に立ちつつ考察すれば、決して切り離すことができない二面である。つまり、行為としては翻訳と創作を明確に区別しつつも、それらを注意深く浸透させることは無駄ではない。それが、情報の授受のみにとどまることがない、言い換えるならば、情報の創造へと接続される一步となる。

3. 経験の問題—未開の状態において—

ベンヤミンは、現在¹⁰を経験が貧困化している時代であると考えた。それはつまり、未開の状態にあるということである。そこで、経験に乏しいとき、未開人はどのようなことをしなければならないのかという疑

⁹ グリッサン, p. 25

¹⁰ 「経験と貧困」が発表されたのは、1933年のことである。よって、ここでの現在とは、第二次世界大戦前の時代のことである。しかしながら、経験の貧困化という問題は、現在までも持続している問題であると考えられる。

⁷ GS IV-16

⁸ GS IV-15

-1 情報社会論2(理論)

問に対して、次のように答えている。

経験の貧困をもたらされた未開人は、最初から始めるほかはない。すなわち、新たに始めること、わずかばかりのもので間に合わせることに、右や左を見ることなく、そのわずかばかりのものから構成すること。偉大な創造者達の中には、真っ先に一度は机の上を掃除しようとするような容赦のない人が、常に存在した。¹¹

つまり我々も、一切を清算してしまわなければならない。未開人と同様、最初の段階から事を始めなければならない。そのためにも、ベンヤミンが述べる、経験の貧困化の問題に迫る必要がある。

ベンヤミンは、経験の問題と「物語」(Geschichte)¹²を結びつける。ここで述べられている経験の側面とは、物語によって、つまりは口から口へと伝えられてきたものである。ベンヤミンは、彼の時代において、そのような経験が貧困化していると述べている。それは特に、第一次世界大戦において経験されたと思われていたことが、実は虚偽であったということにおいて顕著に表される。つまり、「戦場から帰ってきた兵士が黙り込ん」¹³でいたのである。このような現象というものは、近代における「長編小説」(Roman)、そして何よりも新聞に代表される「情報」(Information)という形式が引き起こしている。つまりベンヤミンによって、経験を豊かにする物語から始まり、長編小説、そして情報へと、経験の貧困化の流れが、そしてそれに伴う経験の伝達形式の変遷が明確にされるのである。

では、物語とはいったいどのような効用を持つのか。ベンヤミンは、「物語作者」(Erzähler)を例に出して次のように述べる。

物語作者は、自身が物語ることを経験から取り出してくる。その経験は自分自身のものでもあれば、報告されたものでもある。そして再び、物語ったものを、彼の物語を聞く人々の経験とするのだ。¹⁴

簡潔に述べるなら、物語とは、その内容を経験から取り出していくものである。「事柄を自身が理解したように適切に解釈することは、読者の自由に任されて」¹⁵いて、振幅を持つものでもある。そしてそれは聞き手の新たな経験となり、再度、他者に対して語られる物語となる。

それに対して長編小説は、物語の語り手とは違い、テキストという形式において、作家とある意味で切り

離された形式において語られる。それは、「実際は純粋な内部であり、いかなる外部も知らず、したがって物語るという純粋な叙事的態度の最大の対極」¹⁶として考えられる。したがって、物語に対して耳を傾けているものとは違い、「長編小説の読者は孤独だ」¹⁷と言わざるを得ない。

そして最後に登場するのが、新聞に代表される情報という経験の伝達形式である。物語る技術に対して最も影響を与えたのは、この情報の普及である。そして、この情報の特徴は次のように表現される。

情報のほうは、即座の検証可能性を要求する。そこにおいては、「それ自体で理解できる」ものとして現れるということが最重要である。¹⁸

つまり、情報が即座に検証可能であればあるほど、それは一つの事実として、我々の身近な出来事の判断の拠り所となる。さらに、物語とは対照的に、それはそうであると読者に対して突きつけられ、読者が自身の経験へと参入させる解釈の振幅が大きく失われる事になる。

ベンヤミンはこのように、経験の貧困化と経験の伝達形式の変遷を結びつけて論じている。つまり当時は、そして我々が生きる現在でも、この問題の持つ射程は広いものである。このような状態において、我々は真の経験なるものをノスタルジックに憧憬するのではなく、新たに作り上げていかねばならないのである。それは、未開人のように。

では、それは一体、どのようにして行われるのであろうか。それには、ベンヤミンが述べる、物語に特有な「助言」(Rat)が重要であると考えている。

どの場合においても、物語作者とは、聞き手に対する助言を心得ている男である。(中略)助言とは、ある質問に対する答えというよりもむしろ、(ちょうど今、繰り広げられている)出来事のこれからの続きとしての、ひとつの提案なのである。¹⁹

問いに対する答えという形式は、先に述べた情報のことである。それは、起きた出来事に対する一つの報告に過ぎない。それに対して助言とは、現在起きている問題に関する、潜在的な多様性の中にある、ある一つの提案である。それは、確かに一つの方向を示しはするが、それは物語の語り手から強制されるものではない。なぜなら、この助言とは物語ることからもたらされはするが、それは我々の内から語りかけてくるものでもあるからだ。つまり、その物語を振幅を持つものとして聞くことにより、それは聞き手の経験へと書き込まれる。その状況において、今ある出来事に対す

¹¹ GS II-215

¹² Geschichte を文脈に応じて、「物語」、もしくは「出来事」と訳出する。

¹³ GS II-439

¹⁴ GS II-443

¹⁵ GS II-445

¹⁶ GS III-232

¹⁷ GS II-456

¹⁸ GS II-444

¹⁹ GS II-442

-1 情報社会論2(理論)

る、一つの提案が語り出されることになる。これは、ある画一的な、そして一種の透明な普遍性という情報に固有な、反復可能な答えでは決していない。それゆえに助言とは、その場、今ここに応じた、一回性を持つものとして考えられる。

しかし、ここにおいて、ベンヤミンが次のように述べていることに注意を払う必要がある。

助言を手に入れるために、まずはじめに、一度は出来事を物語るができる必要があるだろう。

²⁰

ここにおいて、先に述べた翻訳と創作の問題が、経験の問題と交わることになる。助言を手に入れるためには、つまり物語を聞くためには、出来事を物語る、つまり物語を創作し、そして物語ることが求められる。

4. 混合の思想—翻訳と創作の相互浸透—

翻訳と創作が交わる点、それはまさに、経験の問題を取り上げるときに形成されるものである。経験の問題を考えるに当たり、この未開の状態をむしろ好意的に受け止める必要がある。というのも、新しきものの創造には、古きものの打ち壊しという一面が必要だからだ。

ここでは、翻訳と創作の交点を考察し、それを経験の問題へと結びつけたい。翻訳と創作を相互浸透させること、これはベンヤミンにおける経験の貧困化の問題に対し、一つの道筋を示すことになる。それは、グリッサンの次のような言葉からも理解できよう。

混合の思想（原文ママ）、単に文化的混合だけではなく、一步進めて、混合の諸文化の震える価値の思想、それはおそらく我々を諸々の限界、あるいは、我々を虎視眈々とねらっている不寛容から救ってくれ、我々に新たな関係性の空間を開いてくれるだろう。²¹

先に述べたように、ベンヤミンは経験が貧困化した現在を未開の状態と呼んだ。そのような状態にあるからこそ、そしてそのような状態をある意味において肯定的に捉えるからこそ、そこには混合があると言える。つまり、先にも述べた物語、長編小説、そして情報という諸形式が混合するのである。これらの形式が混合し、そして互いが互いを刺激しあう時、そこには新たな関係性が開かれることになる。つまり、翻訳と創作を相互浸透させることも、それと同様に考へる必要があるだろう。

以前に自己規定の二重性の問題に触れたが、これは翻訳と創作に対応するものであった。我々という存在は、人々との関係の中で生きている存在である。つまり、絶対的に他と隔絶した自己、他との関係を持たない自己というものが、前提として存在するのではない。

我々という存在は、ある関係性において、自己を外的に規定しつつも内的に規定していく、そのような存在である。その中で、我々が助言を手に入れるためには、他者の物語を聞くこと、そして我々が物語を語り出すことが必要である。

創作は言語の全体性に向かうのではなく、直接的に、特定の言葉による意味の関連をめざすものである。それはまさに、自己のうちに、つまり究極的には私語²²とも呼べるようなもののうちに、その言語による意味の連関を創り出す。それは、自己のうちに、その自己のみが語り出せる物語を創り出すということでもある。この物語によって、我々の個としての自己が創出されてくるのである。それは、地から図が浮かび上がってくるようにである。

しかしながら、自己のうちに物語を創り出すということは、自己のみで完結するものではない。それは、我々という存在が関係性の中においてあるということからも理解できるが、次のことにも注意しなければならない。それは、自己のうちに多様なものが響きあっていないもの、その中に他者を受け入れる間隙をふくまないもの、それというのは凝固した変化なきものである、ということである。語弊を恐れずに言うならば、それは精神的な死である。ここにおいて重要となるのが、多様なものを自己のうちに響かせあうことを目的とする翻訳である。

翻訳とは、その言語のなかに原作の反響を招き入れること、そして言語の全体性を志向することである。その全体性とは、関係性としての全体性である。つまり、我々がおかれている関係性²³を、関係性としての全体性を志向するものこそが、翻訳なのである。その翻訳において、自己は他者の物語を招き入れる。それはある一義的な解釈を強制しない振幅を持つものであり、経験において伝達可能なものが物語となり、自己のうちに書き込まれるのである。当然そこには、伝達不可能な部分も存在する。しかしながら、それを単純に、否定的なものとして捉えてはならない。グリッサンも述べるように、「場所はその還元不能な中心と計測不能な周辺によって大きくなっていく（原文ママ）」²⁴のだ。そのような還元不能な中心を、ある透明な普遍的なものという幻想に還元してはならない。そのような還元不能な中心、不透明なもの、翻訳不可能性が存在するからこそ、我々は翻訳するのである。そして、翻訳において翻訳しきれないものがあるということそれ自体が、我々の自己の差異化の原理とも関係してくるであろう。

翻訳と創作を相互浸透させること、その交点を自

²²人間の精神生活のどのような表出も、言語の一種として理解することができる。

GS II-140

²³ カッチャーリが、意志的な命名に把握しうるのは関係性の中におかれた存在だけである、と述べていることにも注意を払う必要がある。

カッチャーリ, p. 71

²⁴ グリッサン, p. 54

²⁰ GS II-442

²¹ グリッサン, p. 10

-1 情報社会論2(理論)

己に見出すこと、それがもたらすものとは、新たなる関係性である。それは、自己を形成しながらも、そのうちに多様なものを招き入れる、そのような関係性である。すなわち、自己の物語を創り出すこと、他者の物語を聞き、自己のうちに経験として書き込むこと、そして物語を語ること。これらの循環により、自己は形成され、そして助言を語り出す経験が創造されていく。注意しなければならないことは、この循環は、同じ場所に留まり続ける循環では決していないということである。なぜならば、自己のうちに他者の経験が書き込まれることにより、自己の地が組み変わるからである。ベンヤミン風に言うならば、それによって自己のうちに新たなる星が見出されることになる。そしてその地において、その場、今ここに応じて、新たなる図が、つまりは新たなる星座が表現される。これというのは一回性を持つものであり、過去の記憶の想起という場面以外においては、反復可能なものではないだろう。更に言えば、そのような想起という場面においても完全に反復可能かどうか、確かではない。

我々は混合の思想を通して、翻訳と創作が相互浸透する場所を見出した。このような場において、現在において行われている出来事に関する提案としての助言が生成されてくることになる。また、情報過多であり、情報社会である現在とは、経験が貧困化する反面、我々が見出した経験が豊饒化する可能性も秘めている。経験の伝達形式という側面に注意を払いながらも、翻訳と創作の交点において生み出される助言に関する考察を深めていきたい。

5. 翻訳的情報創造へ

助言とは、ある出来事に対する答え、というよりも、それに対するこれからの見通しとしての一つの提案であった。それは、問題が与えられれば、必ず答えが一義的に決定されるようなものではなく、むしろ、多様な潜在的なものから導出された、一つの提案である。ベンヤミンの次の言葉から考察を再開したい。

物語作者の課題とは、経験という原料を——他人のものであれ自分のものであれ——、堅固で有益な、そして一回限りのやり方で加工することから成り立つのではないのか？²⁵

ここで述べられている、経験という原料を一回限りのやり方で加工したものこそが物語であり、それがもたらす助言なのである。そしてこの助言こそが、翻訳と創作の交点に創造されるものであり、新たなる関係性を築き上げるものである。それというのも、「ある物語に耳を傾ける人は、語り手とのつきあいの場にいる」²⁶のであり、そのとき、物語を聞く自己は、交流の、交通の、そして関係性の場に置かれることになる。それはつまり、翻訳が創り出す関係性である。そして同時に、そのような自己は物語作者となる。自己のう

ちに書き込まれた他者の経験が星となり、内的な星々の組み換えが起こり、そして新たなる星座が見出される。それはつまり、創作である。言い換えるならば、地に新たなる経験が組み込まれ、それが内的情報に作用し、以前とは違う図を浮かび上がらせたということである。

ここで問題となるのが、自己のうちに書き込まれる経験（物語）と、書き込まれない経験（ベンヤミン的な意味での情報）とが存在するという事態である。物語としての経験は、聞き手に対して解釈を一義的に決定させないという振幅ある構造を持つため、そのときの出来事に対しての解釈を、聞き手としての自己のうちに発生させる。

しかしながら、新聞などに代表される情報は、このような物語とは異なる構造を持つのである。

情報は、それがまだ新しかった瞬間に、その報酬を受け取っている。情報は、ただ瞬間においてのみ生き、自身を完全にこの瞬間に引渡し、そして時を逃すことなく、この瞬間に自分自身を説明しなければならない。²⁷

情報は、それ自体で完結し、そして理解できることが重要である。それは通常、長い時間が経てばその価値が失ってしまうものである。この情報は、助言的な経験としては、自己のうちに書き込まれることはない。それはあくまでも、自己の外で起きている出来事に対する一つの答えでしかない。

つまり、自己のうちに書き込まれる経験とは、助言的な要素を含むものである。物語を聞いた自己はそれを基礎の一つとし、ある出来事に対する一つの助言を得るということである。物語作者が語り出す物語は、「賢者のように、すなわち、多くの場合に対して」²⁸の助言を心得ている。確かに、その物語は、多くの場合に対して助言を心得ているため、その物語自体は一回的なものとは言えないだろう。しかし、それが一義的な解釈を強制しない以上、その物語は聞き手の状況に応じて、一回限りの、それに加えて聞き手の内部で持続する助言を発生させるのである。

これとはまさに、《翻訳的情報創造》と呼べるものであろう。翻訳を通して、《助言としての情報》（ここで述べる情報とは、ベンヤミンが述べる情報とは異なる。ベンヤミンが述べる情報とは、メディアとしての、メディアによる情報と、仮に言い換えることができるかもしれない。）が伝達されるのである。そして、この助言としての情報を自己のうちに書き込むことにより、自己のうちに創作が行われ、それは新たなる物語を生成させることになる。それはまさに、千夜一夜物語において、一夜の物語が次の一夜へと接続し、流れ込むようにである。

しかし現在は、未だ未開の状態であろう。それはベンヤミンが述べたように、経験の貧困化に端を発して

²⁵ GS II-464

²⁶ GS II-456

²⁷ GS II-445

²⁸ GS II-464

-1 情報社会論2(理論)

いる。この事態は、ベンヤミンが述べるところの情報、つまりはマスメディアという伝達形式と関係しているものである。この流れで考察を進めるのなら、この貧困化の頂点にあるものは、サイバースペースであろう。サイバースペースが成長した今、サイバースペースに閉じこもり、個人的な経験の質と量が低下したという問題は、もはや陳腐な表現と化しているほどに、よく耳にするものである。しかしながら、次のようにも考えることは可能であろう。すなわちそれは、経験の貧困化に対する新たな「未開＝野蛮な状態」(Barbarentum)である、と。それは、サイバースペースが新たな関係性を築き上げる一つの場になるということである。そこにおいて、先に考察したような助言としての情報はどのような役割を担うことになるのだろうか。

6. 結論にかえて

本論において、ベンヤミンの経験の貧困化という問題からはじめ、翻訳論を通過し、情報創造の問題へと接続してきた。ベンヤミンが未開の状態と呼ぶものは、現在において一つの頂点に達しているだろう。しかし、それを悲観的にのみ考えてはならない。それとは、何か新たなものが生まれる状態でもあり、新たな関係性が生成されるものでもある。そしてサイバースペースとはまさに、未開の状態における野蛮なものであろう。それは、我々の経験をより一層貧困化させるものという側面も持ちうるが、しかしながら、翻訳と創作を加速させるものでもある。ベンヤミンが述べる意味での情報の授受に留まってしまえば、それは貧困化の道を突き進むことになるだけである。そうではない道、それとは別の門を開くことが、今後の課題となろう。そこには、本論において考察した翻訳的情報創造、そして助言としての情報が重要な位置を占めることになる。そして、この問題に対して十分に思考することこそが、我々の使命である。

世界の多様性にしだいに加速された速度で接触していると、我々は供給された情報の洪水から抜け出て、我々の偶然に秩序を与えるために、立ち止まって考える時間が必要となる。²⁹

我々は自己に固有の速度を持つ必要がある。そして思考するために、我々は精神的に退屈な状態を創り出し、必要に応じて立ち止まる必要がある。

退屈とは、経験という卵をかえす夢の鳥である。

30

参考文献

- 1) Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp

Frankfurt am Main, 1972-1989.

ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用は、上記の全集からとした。本論文中におけるベンヤミンからの引用箇所は、GS の略号の後に、全集の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で記す。また、訳出の際に、『ベンヤミン著作集』（晶文社）と『ベンヤミン・コレクション』（筑摩書房）を参考とした。

以下に、引用した著作の題目、邦題、そして全集の巻数、ページ数を示す。

Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen 「言語一般および人間の言語について」(GS II, S. 140ff.)

Erfahrung und Armut 「経験と貧困」(GS II, S. 213ff.)

Der Erzähler : Betrachtungen zum Werk Nikolai Lesskows 「物語作者 ニコライ・レスコフの作品についての考察」(GS II, S. 438ff.)

Krisis des Romans : Zu Döbns »Berlin Alexanderplatz« 「長篇小説の危機 デーブリン『ベルリン・アレクサンダー広場』について」(GS III, S. 230ff.)

Die Aufgabe des Übersetzers 「翻訳者の使命」(GS IV, S. 9ff.)

- 2) マッシモ・カッチャーリ，柱本元彦訳，岡田温司解説，『必要なる天使』，人文書院，2002
- 3) エドゥアール・グリッサン，恒川邦夫訳，『全一世界論』，みすず書房，2000
- 4) 中村雄二郎，『デジタルな時代』，青土社，2000

²⁹ グリッサン，p. 164

³⁰ GS II-446